

編集後記

早稲田大学教職大学院における教育研究活動の一環として発刊されている紀要も、教職大学院開設10周年を経て、わずかではあるが進歩しつつある。

まず、職場に戻ってからも実践研究活動をつづけ、その成果を投稿してくる修了生が一定数現れるようになったことを報告しておきたい。自らの実践を論文としてまとめることは意義のあることであり、その内容を広く問う上でも、また、後輩に刺激を与えるうえでも、修了生のさらなる投稿を期待したい。次に、これまで、研究活動と同窓会活動を一体化する形で進められてきた早稲田大学学校教育学会・校友会が、本年度よりその機能を明確に区別したこと、そして、早稲田大学学校教育学会を、研究活動として位置づけなおしたことを挙げておこう。8月に実施された学校教育学会では、京都大学の西岡加名恵先生に「パフォーマンス評価の理論と実践 ―「逆向き設計」論を中心に―」と題した基調講演をお願いした。教育評価は実践を考えるうえで不可欠であるが、残念なことにこの数年、教職大学院に教育評価の授業を開設することが叶わないでいた。当日は短い時間であったものの、第一線の研究者の講演を拝聴できて参加者には大いに刺激になったのではないかと思われる。また、基調講演に続く自由研究発表で、修了生・在学生による報告がなされ、本紀要に概要を掲載するに至った。学校教育学会での自由研究発表がより盛んになり、紀要における学校教育学会の報告頁数が増えていくことを願っている。最後に、紀要投稿者の資格が広がったことも周知しておく必要があるだろう。これまでは、在学生には投稿資格はなかったが、本号からこれを認めることになった。現在1年生の皆さんは、次回の紀要への投稿が可能なので、是非、実習の成果を論文としてまとめ、投稿していただけたらと思う。

2018年9月に執行部の交代に伴い紀要編集委員長としての役割はこれで終わるが、ささやかなこうした歩みを、確かなものに育てていくことを念じて、次にバトンタッチしたいと思う。

(油布)